

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代を捉え直す場としての「現代文」授業の可能性：〈接触〉を問題領域として
Author(s)	井上, 泰
Citation	中等教育研究紀要 / 広島大学附属福山中・高等学校, 62 : 124 - 129
Issue Date	2022-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/53477">10.15027/53477</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053477">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053477</a>
Right	
Relation	



# 現代を捉え直す場としての「現代文」授業の可能性

## －〈接触〉を問題領域として－

井上 泰

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は社会や教育活動を変えたが、その一方でこれまで問われてこなかった新たな問題領域を開きもした。〈接触〉はその一つである。本稿では、新たに問われつつある〈接触〉をテーマに設定して行った高校3年生の「現代文B」の授業実践について報告する。

### 1. はじめに—〈接触〉という問題領域

3密—「2020ユーキャン新語・流行語」の“年間大賞”という称号が漂わせている軽薄さとは裏腹に、この言葉は現代日本社会の生活を少なくとも教育活動を変えていった。

休校を始めとして、学校行事の取り止めや変更、感染リスクを軽減するための環境作りや黙食などの学校生活上の取り組み、また授業の場においても話し合い等の回避など他者との接触は極力避けたかたちで学習活動が仕組まれていった。

有効な手立てがない中では、他者との接触は回避せざるを得ない。しかし、いわゆる“新しい生活様式”を取り入れた教育活動を行って行く中で、今まで結果的に無自覚に育ててきたものが育っていかないのではないか、何か大切なものが失われていくのではないか、そのような漠然とした不安や疑問も同時に立ち上がってきた。

そもそも他者との身体的な〈接触〉がもたらすものとは何だろうか。新しい生活様式が提唱され始めた2020年の段階で、大澤真幸はそのことについて思索していた。

大澤は、チンパンジーの鏡像認知テスト（鏡像に写っている像が自分自身だと認知できるかを試すテスト）の結果を受けて、「鏡に映っている自分の身体をまさに自己の像として理解できるためには、他者の身体を見たことがある、というだけでは足りない。他者と触れ合ったり、じゃれあったり、けんかしたり、といった接触をもともなう相互的な働きかけを他者と経験しているということが、鏡像認知が可能になるための不可欠の条件である」と言い、そして「これはチンパンジーに対する実験だが、おそらく人間も同じである。」と指摘している<sup>1)</sup>。

さらに、続けて新しい生活様式について次のように述べている<sup>2)</sup>。

新しい生活様式がどうしてディストピアなのかが、理論的に説明可能になる。もちろん、人間のコミュニケーションのすべてに、身体的な直接の接触が必要なわけではない。コミュニケーションのほとんどにおいて、そんなものは不要である。しかし、身体的な接触の回避が、

すべてのコミュニケーションにおいて目指されるべき状態、すべてのコミュニケーションにおいて可能なかぎり避けられるべき状態として規定されるのだとすれば、そこから出現する社会は、人間的な自然に反するディストピアだと言わざるをえない。接触ということが基本的に禁じられるならば、それは、人間の自己認識とコミュニケーションの前提条件を否定していることになるからだ。つまり、このとき、すべてのコミュニケーションが不毛であると言わざるをえないからだ。

新しい生活様式が誰にとってもディストピアかどうか、正直、稿者には判断が難しい。しかし、3密が回避を要求する〈接触〉が、人間の自己認識に深く関わっているかもしれないこと、また、〈接触〉を通して自己認識がなされなければ他者とのコミュニケーションそのものが生まれられないかもしれないこと、こうした指摘は非常に興味深い。果たして人間にとって他者との身体的な〈接触〉とはどういうものなのか。そしてそれを回避し続ける社会は、そこに生きる人間は、これまでとはどのように異なっていくのか、または異なるのか。

先に述べたように、コロナは現代社会の暮らしを変えた。その変化はマイナスの要素が多いようにみえる。しかし、社会の変化は今まで問われてこなかった領域を開きもする。これまで無自覚に行ってきた他者との身体的な〈接触〉とは、人間にとってどういうものなのか。そうした〈接触〉に関わる問いが立ち上がる状況の中に学習者を含む現代人は生きているのではないだろうか。

やや長くなってしまったが、以上のように現代の状況を捉えた。そして次に、学習者は〈接触〉ということについてどのように考えているのだろうかと考えた。学習者は他者との〈接触〉がリスクとされ回避を要求される生活の中でその考えを主体化し、その内実を問うことなく過ごしているのだろうか、またはそうでないのか。そうしたことを考え始めた。そして、現代文の授業の中で〈接触〉について改めて問い直していくことで、〈接触〉を回避する社会（＝現代）そのものを捉え直していくことができるのではないだろうかと考え始めた。

現代の状況が新たに開いた問題領域をテーマとして素早く取り上げ、テキストを読んで言葉を問い直し、それをもって学習者が自身が生きる世界(=コロナ禍の現代)を捉え直していく。現代文の授業がそうした場になることを期待して実践した授業を本稿では報告したい。

報告する授業実践は、2021年度高校3年生3クラス(合計118名。なお、本校では文理や学力差でクラスを分けて構成している。)に対して、2学期当初(9月から10月にかけて)に行った、「現代文B」(2単位)である。

## 2. 単元構成

ここでは単元構成を簡潔に述べる。単元は、まとまりをつけるため第1部と第2部という2部構成で考えた。

【第1部】コロナ禍において学習者が他者との身体的な「接触」をどのように考えているかを探る。

第1次 川上弘美「神様」を読む(3時間)

- ・「わたし」の「くま」へのまなざしを読み解くことで、〈他者〉理解について考える。
- ・作品における「抱擁」の意味について考える。

第2次 川上弘美「神様2011」と「あとがき」を読む(1時間)

- ・「神様2011」を「神様」と比較して読むことで、「わたし」の変わったところとそうでないところについて考える。
- ・「あとがき」を読み「神様2011」に込めた書き手の思いについて考える。

第3次 「神様2021」を書き、読み合う(2時間)

- ・「神様2021」を書き、読み合う。詳細は後述。

【第2部】テキストを読み〈接触〉についての考え方を拡充し、得た知見から現代を捉え直す。

第4次 伊藤亜紗『手の倫理』を読む(6時間)

- ・「触覚」や他者の身体に「触れる」ことについての考え方を拡充する。

第5次 『毎日新聞』(2021年10月7日朝刊)の「特集」「コロナ下 伝えた体温」(6頁)に掲載された報道写真とそれを伝える見出しについて、これまでの学習をふまえて考える。(0.5時間)

- ・これまでの学習を通して得た知見から、報道写真を読み解いたり、それを伝える新聞記事の見出しを批評したりすることで、抱擁への理解を深める。

以上が単元構成である。

## 3. 川上弘美「神様」・「神様2011」の分析及び「神様2021」の創作活動について

次に第1部で扱った川上弘美「神様」及び「神様2011」について述べる。

川上弘美「神様」は、1999年に発表されたものである。昔気質の「くま」と「わたし」との交流を「わたし」の視点から描いている。「わたし」にとっては他者である「くま」への「わたし」のまなざしを読み解くことで、〈他者〉理解について問題にできると考え、授業で読み解いていった。

また本作品を教材に設定した理由は、物語の最終場面で「わたし」が他者である「くま」と抱擁するからである。すなわち別れ際の次の場面。

「抱擁を交わしていただけませんか」

くまは言った。

「親しい人と別れるときの故郷の習慣なのです。もしお嫌ならもちろんいいのですが」

わたしは承知した。

くまは一步前に出ると、両腕を大きく広げ、その腕をわたしの肩にまわし、頬をわたしの頬にこすりつけた。くまの匂いがある。反対の頬も同じようにこすりつけると、もう一度腕に力を入れてわたしの肩を抱いた。思ったよりもくまの体は冷たかった。

「今日はほんとうに楽しかったです。遠くへ旅行して帰ってきたような気持ちです。熊の神様の恵みがあなたの上にも降り注ぎますように。それから干し魚はあまりもちませんから、今夜のうちに召し上がるほうがいいと思います」

部屋に戻って魚を焼き、風呂に入り、眠る前に少し日記を書いた。熊の神とはどのようなものか、想像してみたが、見当がつかなかった。悪くない一日だった。

授業で焦点を当てたのは「わたし」が「くま」と抱擁した際に、「思ったよりもくまの体は冷たかった」と感じたことである。1日を通して「わたし」は「くま」と会話し、様々な様子を見ることを通して「くま」を理解し、それに基づくイメージがおそらく自然と出来ていた。しかし、それが温かなイメージのある「抱擁」によって逆に裏切られるのである。話すこと見るのではなく、触れることによって実際の「くま」を知った。ここに書き手の〈他者〉観や〈接触〉観をうかがうことは可能だろう。

また、東日本大震災直後に発表された「神様2011」では「放射線量」を意識しながらも、それを「そんなこと」と一蹴し「くま」の抱擁を受け入れる「わたし」が描かれている。

わたしは承知した。くまはあまり風呂に入らないはずだから、たぶん体表の放射線量はいくらか高いだろう。けれど、この地域に住みつづけることを選んだのだから、そんなことを気にするつもりなど最初からない。

くまは一步前になると、両腕を大きく広げ、その腕をわたしの肩にまわし、頬をわたしの頬にこすりつけた。くまの匂いがする。反対の頬も同じようにこすりつけると、もう一度腕に力を入れてわたしの肩を抱いた。思ったよりもくまの体は冷めたかった。

「今日はほんとうに楽しかったです。遠くへ旅行して帰ってきたような気持ちです。熊の神のお恵みがあなたの上にも降り注ぎますように。それから干し魚はあまりもちませんから、めしあがらないなら明日じゅうに捨てるほうがいいと思います」

部屋に戻って干し魚をくつ入れの上に飾り、シャワーを浴びて丁寧に体と髪をすすぎ、眠る前に少し日記を書き、最後に、いつものように総被曝線量を計算した。今日の推定外部被曝線量・30  $\mu$ Sv, 内部被曝線量・19  $\mu$ Sv。年頭から今日までの推定累積外部被曝線量・2900  $\mu$ Sv, 推定累積内部被曝線量・1780  $\mu$ Sv。熊の神とはどのようなものか、想像してみたが、見当がつかなかった。悪くない一日だった。

抱擁がリスクと分かりながらもそれには囚われず他者との身体的な〈接触〉を意志をもって明確に選択する「わたし」が描かれているわけだが、そのために「神様」よりも抱擁の意味が際立ち、また、大きく変わってしまった社会においても抱擁は人間にとって失ってはならない「日常」だとする書き手の考えを読み取ることができる作品である。

次に「神様 2011」を2021年バージョンに書きかえる創作活動のねらいについて述べる。本活動は、「神様 2011」の、抱擁は人間が失ってはならない日常であるという呼びかけに、2011年と似た状況の中で応答するものとして、また改めて「抱擁」（他者との身体的な〈接触〉）について考えさせるものとして行った。

創作活動は具体的に次のように指示をした。

もし、「神様 2021」を書くとするば、あなたはどのように書きますか。次の〈抱擁〉の場面を書きかえてみよう。

「わたしは承知した。～悪くない一日だった。」

また、書きかえる内容は、次の4つである。

- 1 「抱擁を交わしていただけですか」への返事。
- 2 「わたし」の逡巡（「くまはあまり風呂に入らないはずだから、たぶん体表の放射線量はいくらか高いだろう。けれど、この地域に住みつけることを選んだのだから、そんなことを気にするつもりなど最初からない。）。2021年ならばどんなことを考えるだろうか。
- 3 「わたし」の答え（「1」）に対する「くま」の言動など。
- 4 部屋に戻ってからの「わたし」

では、学習者はどのように思索し、どのような言葉で

書きかえただろうか。次にそれを見ていきたい。

#### 4. 「神様2021」創作活動のまとめ

「くま」の抱擁の申し出を承知した数と断った数は、ほぼ半々であった。ここでは承知したものと断ったものをそれぞれ一つずつ、その全文を引用する。

【A】わたしは承知した。今日はずっと一緒にいたのだから、濃厚接触がどうか気にするのは今更のように思われた。そういえば、濃厚接触の正しい定義は何だったろうか。

くまは一步前になると、両腕を大きく広げ、そうはいつても少し遠慮がちにその腕をわたしの肩にまわした。くまの匂いと、思ったより冷たい体温が伝わってきたのも束の間、くまはすぐに私を放した。

彼なりの感染予防策ということか。抱擁は求めるのに、変なところでやはり真面目なままである。

「今日はほんとうに楽しかったです。遠くへ旅行して帰ってきたような気持ちです。熊の神のお恵みがあなたの上にも降り注ぎますように。それから干し魚はあまりもちませんから、めしあがらないなら明日じゅうに捨てるほうがいいと思います」

部屋に戻り、シャワーを浴びて丁寧に体と髪をすすぎ、眠る前に少し日記を書いた。熊の神とはどのようなものか、想像してみたが、見当がつかなかった。悪くない一日だった。

【B】私は断った。一瞬迷ったがリスクが高いと思った。ウイルスに感染してから発症まで最大二週間だ。もし私が無症状で気付かないままくまにうつしてしまったら…。そもそもくまが感染し得るかどうかはよく分からないが、もしかしたらくまもウイルスを持っているかもしれない。いずれにせよ、この時代にそんなに近距離で接することには抵抗がある。

くまは少しがっかりしたように、しかし私の返事をあらかじめ分かっていたように、「そうですね。やってはいけませんよね。仕方がないですね。」と自分に言い聞かせるかのように言い、うつむいてしまった。しばらく気まずい空気が流れた後、くまは「でも今日は久しぶりに人と一緒に過ごすことができ楽しかったです。ありがとうございました。」とだけ言った。

部屋に戻って手洗いうがいを丁寧にした後、シャワーを浴びて眠る前に少し日記を書き、最後にいつものようにニュースを確認した。今日の新規感染者数、重症者数。緊急事態宣言はまた延長された。ワクチンの効果に変異株で低下すると言っている人や、どうやらブースター接種を始める国もあるらしい。暗いニュースばかりを見た後、以前のような当たり前の生活が当たり前でないと感じた。ハグがダメなら、せめて、もっと笑顔で別れのあいさつをしていれば良かった、と後悔した。

まず、それぞれが新型コロナウイルスに関わる言葉を

用いながら「2021」を構成していることを確認したい。それぞれ抜き出すと次のようになる。

【A】「濃厚接触」、「感染予防策」

【B】「リスク」、「ウイルス」、「感染—発症—二週間」、「無症状」、「新規感染者数」、「重傷者数」、「緊急事態宣言—延長」、「ワクチン—効果」、「ブースター接種」

その他、「Uber Eats」、「肘（グー）タッチ」、「画面越し（オンライン）」、「発熱」、「味覚」、「嗅覚」といったコロナ禍を代表する言葉も使われていた。

こちらが想定していた以上の多様な言葉をもって2021年を描き出していることに正直驚いたところもあるが、逆にそれだけそうした言葉（状況）の中で学習者が生きていることもわかる。それは、【B】にある「暗いニュースばかり」にも端的に表されているだろう。

では、次に「抱擁」についてはどうだろうか。先に「くま」の申し出を承知した数と断った数は半々だったと述べたが、そのことを各クラスで伝えたところ、驚いた様子であった。どうもほとんどの学習者は現代では「抱擁」は難しいのではないかと考えていたようだ。【B】にあるように「抱擁」は「抵抗」あるものになっているようだ。

だがしかし、実際には半数程度、抱擁を承知した学習者がいた。それはなぜであろうか。

「神様 2021」を書いた後に、抱擁を承知した／しなかった理由を書かせたところ次のような記述があった。（学習者の意見文等の傍線は稿者が付した。以下同様。）

・この「神様」という物語のシリーズは人間の温かみを伝えるために書かれていると思うので、ここで拒否してしまうとそれがコロナに負けるような気がして嫌だった。

『神様』のシリーズが描こうとするものを「人間の温かみ」と理解し、それをコロナから守ろうとする学習者の思いがここからは読みとれる。また、次のような記述もあった。

・この二人にはハグしてほしいと思っていたからです。というか、距離感をコロナで見失ってほしくなかったんですね。たぶん。

「神様」が描く抱擁の「人間の温かみ」とは何か、また他者との「距離感」がどういったものか、さらに言葉にさせたいところだがそれはさておき、学習者は「神様」が失ってはならないものとして提示する抱擁を守るべきものとして理解し、コロナ禍の状況においても抱擁を承知させたことが分かる。

このように「神様 2011」の読者への呼びかけの理解とそれへの応答が、「神様 2021」において抱擁を承知させた要因の一つとなったようだ。

ところで、断る方を選択した理由にも抱擁に関わって重要な意見が書かれていた。

・承知しなかった理由は、私が書いた文章（稿者註：本学習者の「2021」では「わたし」はコロナ禍を理由に断っている。）とは本当は違い、このご時世で、人との接触は控えるよういわれているので、人との抱擁はいつもより深い意味があると思ったからです。人と人との愛情だけでなく一歩先の恋愛にまでつながりそうな気がして、承知しないを選びました。

接触を控えるように言われているからこそ、その中の抱擁の意味が深いものに変化する。「神様」の呼びかけを受け取りそれを固持するだけでなく、創作活動を通して自身でコロナ禍における抱擁の意味について問い直しているのがよく分かる記述である。

コロナ禍において他者との身体的な〈接触〉を学習者がどのように考えているかを探るために「神様」・「神様 2011」を読み「神様 2021」を創作したが、これまでみたことをまとめると、時代状況に応じて抱擁は「抵抗」あるものになり、多くの学習者が難しいものとして捉えていることが分かった。ただ、そうはいつでもコロナ禍だからこそ抱擁を「人間の温かみ」や他者との「距離感」のあり方を伝えるものとして保持したいと考えた学習者も多くいた。また、抱擁の意味を自身で問い直す姿も僅かだが確認できた。

さて、以上が第1部の報告であるが、それを終える前にもう一つ、現代小説を現代版に書きかえる効果について触れておきたい。

創作活動の振り返りには次のような記述があった。

・私自身、「神様 2021」を書くことで、コロナ禍の中、何を気にして生きているのか、どんな日常を送っているのかを見つめ直すことができたと思います。

・神様2011を参考に書くなかで、当たり前と思っているその「当たり前」がいつも簡単にくづがえされることに驚いたのと同時に、現実の世界で夏でもマスクをつけている状況に慣れつつある自分に対して、自分は果たして状況を客観的にとらえられているのかという疑問が生まれた。自分が放射線についての描写に違和感を覚えるのに、マスクについての描写には覚えぬこの感覚に自分を見直してみる必要があると思った。

自分がどのような「日常」の中で生きているのか、そ

の状況の中で暮らすことで作られていく「当たり前」(感覚)を客観的にとらえられているのかなど、現代やそこで生きる自分を「見直」そうという考えをもてたことがうかがえる。現代小説を現代版に書きかえる活動には、その活動を通して現代や自己を相対化する効果があるようだ。

また、作品を読み合うことで、コロナ禍との向き合い方も互いに確認できたようだ。

・「神様 2011」はなにか温かさを感じることでできる「神様」から、その部分が冷たくなったような印象をうけたのに対して、「神様 2021」は、なんでか分からないけど、温かさがあった。みんなおもしろおかしくふざけたことを書こうとしているわけではないのに、なぜかそこにユーモアがあった。「神様 2011」は救いようがなく変わってしまった悲しい今を描いているのに対し、私たちが考えた「神様 2021」はどこか今このコロナの時代にたち向かうといったような、希望ではないけど、どこか暗い感じではなく、明るいといってもそれもちがうけどなにか楽しさがあった。

授業者の力というよりは学習者の力であるが、コロナ禍による影やふたぎのようなものが、“創作”活動やその読み合いを通して少し揺らいだり、また多少の励ましになったりしたことも記しておきたい。

## 5. 『手の倫理』と学習者

第2部の冒頭では、先に見た「このご時世」では「抱擁」の意味合いが変わっているといった意見や、承知した方を書いた創作文に「肌で感じたくまの体温は思ったよりも冷たかった。でも心はなんだかポカポカした。」とあったことを取り上げて、他者への身体的な〈接触〉は人間の外部にふれるが、それは内部(心)に影響を与えるものとして考えることができるとし、これからの学習では他者との身体的な〈接触〉について考え深めていくことを伝えて始めた。

第2部で教材とした伊藤亜紗『手の倫理』は、これまで十分に議論されてこなかった「触れる」ことの倫理を読者に考えさせるものである。さまざまな具体例を通して「触れる」ことについて考えさせるとともに、いかに触れればいいのかといった技術や倫理について考えさせている。

次に本書から抜き出して読んだ箇所を、章/節によって示す。

第1章「倫理」/ほんとうの体育

第2章「触覚」/ヘルダーの触覚論・内部的にはいりこ

む感覚・「じゃれあい」か「力くらべ」か  
第2章「触覚」/「色を見る」と「人にふれる」・ラグビーのスクラム・距離があるほど入っていける

聴覚の感覚や芸術論、スポーツ選手の感覚や振付家・ダンサーの砂尾理<sup>じやれお おさむ</sup>と小児科医で脳性まひの当事者でもある熊谷晋一郎<sup>くまがやしんいちろう</sup>のセッションなど、本書で取り上げられている豊富な具体例を手掛かりに学習者は筆者の考えを理解していった。もちろん、感覚についての議論なので理解できないといった意見もあったが、そうしたことも含めて学習者は、これまであまり考えてきたことのない「触覚」について考えることができたようだ。紙面に限りがあるので授業の詳細は割愛し、授業の最後に「〈触覚〉について考えたこと」という題で書かせたまとめを次に引用する。

・僕はいろんな感覚の中でも触覚の優先順位は低いと思っていました。どこかへ行くとまずはその景色や状況を視覚を通して把握して、においや音などを嗅覚、聴覚で感じ取ります。正直に言って触覚を使う前に大抵の場合、周りのものを理解してしまいます。でも、「手の倫理」を読んで、触覚以外の感覚では掴みきれない場合や触覚の優先順位が高くなる場合も案外たくさんあるんだなどということを考えました。

・現代は、情報が多くあり、表面で物事をとらえがちな気がするが、情報を一度遮断して、その物に触れ、内側を知覚することで新しく得られるものがあると思う。触覚はそのものの内側の奥の深いところを知ることであり、奥深い言葉であるなど感じた。

その他、〈接触〉について考えたことは多岐にわたるが、他者との身体的な〈接触〉に関わるものを次に示す。

・ただ見たまま、聴いたままを対象として認識するのはなく、表面よりもっと深いところで起こる相手の心の動きを感じて情報を得るという点において触覚の奥深さを感じた。

・今まで意識したことはなかったけれど、私たちは人とふれ合う時に、言葉による対話をするのと同じくらいの頻度で触覚を通じたコミュニケーションをしているような気がします。肩をたたいたり手を握ったり、ハイタッチをしたり…といった行動により、自分の感情を伝えようとするのは日常的に行われています。そのようなやりとりを通じて人と人との仲が深まるということもあるのかもしれませんが。感情伝達の手段として触覚を使うことは、私たちが学ばずとも身につけている対話技術なのだろうと思いました。

他者に触れることは、他者の心の動きを知ることや人と人との仲を深めるための日常的な「対話技術」など、他者とのコミュニケーションにおける〈接触〉の重要な働きについて考えている。他者に「触れる」とは他者の内部に影響を与えるだけでなく、互いに心の動きを知ること／知られることであるということ、そして接触を通して「対話」といったコミュニケーション論にまで視野を拡げて考えることができたようである。

## 6. 「抱擁」を問い深める

単元に取り組む最中、偶然に単元のテーマに合う新聞記事を見つけた。『毎日新聞』(2021.10.7 朝刊)が報じたもので、「新聞協会賞受賞」に「ぬくもりは届く」という題名の報道写真が選ばれたというものだ。写真は、「新型コロナウイルス感染症拡大の影響で高齢者施設内の面会が制限される中、入居する母と防護服を着た娘が思わず抱き合った瞬間」を撮影したもので、記事の見出しには、「コロナ下 伝えた体温」「防護服越しの抱擁」とあった。写真の詳細は、日本新聞協会 HP で確認されたいが、防護服越しとはいえ抱擁する母親の顔は言葉にするのが難しいほど幸せそうである。

授業は、〈接触〉について考えてきたことを振り返った上で見出しについて、

- (1) 「伝えた」とあるが誰が誰に伝えたのか。
- (2) 「伝えた」という一方向的な表現だけで適当か。
- (3) 「体温」とあるが、伝えたのはそれだけか。
- (4) 何を通して「伝え」合ったのか。

の4つについて主に問うた。〈接触〉の双方向性や受動性、人間内部の伝達／感得、さらには「距離があるほど」相手の深部が伝わるなどの逆説的な性質をもって、「抱擁」を問い深めるためであった。そして、問いごとに写真を見せて考えさせていった。考えたことは書かせていないのでかたちには示せないが、発表した意見や考えている様子から、そこで生じたであろう母娘のコミュニケーションについて深く考察し、より意味の深いものとして「抱擁」について考えていけたのではないかと思う。

授業の最後に、これまで他者との身体的な〈接触〉について「抱擁」を具体例として考えてきたが、他者との身体的な〈接触〉とは人間にとってどういうものなのだろうか、そしてそれを回避する現代社会とはどういうものなのだろうかと一方的ではあるが問うて終えた。

## 7. おわりに

時代状況が要求するままに生きるのではなく、その内実を思考することで時代を捉え直す。そうしたことをねらいとして授業を行ってきた。〈接触〉について考え深

めることはできただろうが、果たして現代を捉え直すまで行き着けたかどうかは疑わしい。今後の課題としたい。

また、授業を構想し進めていく中で正直色々な迷いがあった。例え現代を捉え直したところで、具体的な方策がないといった現実的な問題も残る。もしかしたら余計に生きづらさを感じさせてしまうかもしれない。／流動的な状況において本当に現状を把握できているのか。／コロナ感染の状況によっては授業内容を変えなければならないかもしれない、等々。現代で生起していることをタイムリーに取り上げることは是非やその方法などの点において大いに課題が残ったと感じている。

ただ、コロナ禍でさまざまな制限がかかる中、何かをしてあげられない／できないだけではなく、その中だからこそ新たなことに取り組むことができないかとも考えている。今回は、コロナ禍が開いた新しい問題領域をテーマに設定するということがあったが、縮小した教育活動を描くだけでなく、何かしらの可能性を探っていくこともできるのではないだろうか。

今回取り上げた〈接触〉だけでなく、例えば〈利他<sup>3)</sup>〉という言葉もコロナ禍においてよく言われるようになった。これからも社会は新たな言説を生み出し人々に要求していこう。そのような社会に生きる学習者が、言説と対話し、世界を問い、そして世界をよりよいものに創造していくためにはどのような授業を展開していけばいいだろうか。引き続き現代文授業の可能性を追求していきたい。

### 【註】

\* 1 大澤真幸「ポストコロナの神的暴力」(『大澤真幸 THINKING「O」第16号 コロナ時代の哲学』、2020年8月、左右社。24-25頁。)

\* 2 註1大澤論文、24-25頁。

\* 3 参考図書。鎌田實『相手の身になる練習』(小学館、2021年)、伊藤亜紗、中島岳志他『利他とは何か』(集英社、2021年)、中島岳志『思いがけず利他』(ミシマ社、2021年)など。

### 【参考文献】

- ・伊藤亜紗『手の倫理』(2020年、講談社選書メチエ)
- ・荒木奈美「川上弘美「神様」「草上の昼食」論—「くま」の生きづらさを通して見えてくるもの」(『札幌大学総合論叢』(32)、札幌大学、2011年。232-216頁)
- ・日本新聞協会 HP …

[https://www.pressnet.or.jp/journalism/award/2021/index\\_3.html](https://www.pressnet.or.jp/journalism/award/2021/index_3.html)

### 【依拠本文】

川上弘美「神様」,「神様 2011」,「神様 2011 あとがき」…『神様 2011』(2011年、講談社)